

平成 29 年度活動報告書

「日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」活動報告書

(プログラム 1 : 京滋の在地に学ぶ実践型地域研究、2 : 自然と文化ー農の営みを軸にー、3 : ブータンの農村に学ぶ発展のあり方、4 : 在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題、5 : 海外との比較による参加型調査学習で学ぶ京滋のアクティブ・エイジング)

安藤和雄 (東南アジア地域研究研究所)、岩田明久 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)、竹田晋也 (大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)、坂本龍太 (東南アジア地域研究研究所)、矢嶋吉司 (東南アジア地域研究研究所)、内田晴夫 (東南アジア地域研究研究所)、赤松芳郎 (東南アジア地域研究研究所)

全体プログラムの構成

「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして(「まなびよし」プログラム 1~3 講義、「いきよし」プログラム 4~5 義)として、以下の 5 つのプログラムを H29 年度は開講した。プログラム 1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」(ILAS ゼミ 前期月 3、単位 2、担当安藤和雄)、プログラム 2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ プログラム 2 「自然と文化ー農の営みを軸にー」(全学共通科目 前期水 2、単位 2 担当竹田晋也)、プログラム 3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」(ILAS 海外科目 後期集中 単位 2 安藤和雄・坂本龍太)、をプログラム 4 「在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題」(ILAS ゼミ 前期集中)を開講した。また、これらの講義を一つ一つのプログラムとして申請した。プログラム 5 「海外との比較による参加型調査学習で学ぶ京滋のアクティブ・エイジング」(準備段階として集中講義形式)

全体プログラムの課題と活動概要

京都府、滋賀県下の農村地域においても、農業離れ、過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、林地の放置などは進み、その影響により、地域に根ざし農村で育まれてきた生活文化や生活技術(伝統芸能、食文化、棚田などの農耕技術、林野利用技術、灌漑水利施設の維持技術)が消滅の危機に瀕している。他方、農村伝統文化を基軸とした地域再生活動が各地域から個別におきつつある。こうした動きに応じて、都市文化の模倣ではない、新たな発想に基づく「伝統文

化に基づく地域再生活動」を実践・支援し、大学教育における人材育成を盛り込んだ再生モデルとして一般化し、他の地域にも応用できるような仕組みをつくるのが、地域に根ざした大学としての火急の課題であると考え。このことを実現していく上で、既存の ILAS ゼミや全学共通科目、国際交流科目を平成 27 年度として開講、平成 28 年度からは「いきよし」の講義として集中講義により宿泊型で地元の人々から学ぶための参加型農村調査、参加型ワークショップ、集落機能や農耕地の維持のためのボランティア実践活動のアクション・リサーチ、資料作成などを行いそれぞれ開講している。以下プログラム 1～5 を個別に報告する。また、平成 29 年度は京都大学 COC 事業が京都市との連携で開催した中学生対象の 10 月 28 日に開催されたジュニア・キャンパスで「山の上でウシと暮らす!？」のテーマで東南アジア地域研究研究所実践型推進室の連携助教である赤松芳郎氏がゼミナール形式で講義をした。また、京都大学 COC 事業が受け入れとなった 2017 年 8 月 1 日から 12 日に開催された「China-Japan-Korea SERVE Initiative 2017」のプログラムを宮津市、京都府との一まち一キャンパス事業との連携により、香港理工科大学、韓国梨花大学、北京大学、京大の学部生の総勢 12 名余と引率教員 3 名（1 名香港理工科大学）を受け入れ、実施した。

参加学生の到達目標

「日本の地域再生の草の根の活動の実例を学び、ブータンと日本における過疎問題、離農の問題の基本的な事項についても理解する。実践型地域研究の手法についても学ぶ。課題（講義内での発表等）に対して、自主的、継続的取り組む能力を養う」と設定し、平成 29 年度もいずれも十分な成果を得ることができた。

個別プログラム

プログラム 1 京滋の在地に学ぶ実践型地域研究

課題

本プログラムは東南アジア地域研究研究所が地元と協働運営している亀岡、守山、朽木、南丹市美山町の農村部で、各 NPO、自治会、集落住民との協働で運営しているフィールドステーション事業と科研プロジェクト「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（安藤代表）、「一まち一キャンパス事業」などと協働実施する。①講師招へい：講師には、各フィールドステーションの関係者を招へいする。京都学園大学教員、NPO の「プロジェクト保津川」や「平和もやいネット」のメンバー、南丹市美山町知井振興会事務局長、滋賀県守山市美崎自治会会長らに講義を依頼する。②現地見学：京都府の中山間村のもっとも大きな課題となっている集落維持、放棄地の維持について知るため、地元の人たちとの交流を通し、地元の人たちの経験を学ぶ。そのために美山町知井地区において、放棄地の見学、知井振興会での聞き取りや、振興会事務局長からの講義などを聴講する。また、宮津市との「一まち一キャンパス」事業との連携により地産地消や丹後半島で過疎と放棄地の実態、再生事業などを学習する。③交流会：プログラム 3 の関連で招へいするブータン王立大学シェラブッチェ校

の講師や若手研究員、プログラム4の集中講義の参加者との合同で、過疎問題・離農問題に関する交流会を行う。④月例研究会 5月より、毎月（12月と8月は休止）、東南アジア地域研究研究所において京滋フィールドステーション実践型地域研究会を講師を招き17:30以降の夕方に開催する。④教材作成 国際会議や東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室が作成するニューズレターや関連の国際会議、ワークショップなど報告書を本プログラムの教材として印刷する課題を計画として掲げて活動を行った。

成果

平成29年度 大川活用プロジェクト活動報告書 ～美崎大川を舞台にもう一つの地方創生を考える～



美崎自治会、立命館大学学生活動団体 haconiwa、守山市
京都大学(グローバル生存基盤展開ユニット・東南アジア地域研究研究所、
地(知)の拠点事業: KYOTO 未来創造拠点整備事業-社会変革期を担う人
材育成、東南アジア地域研究研究所国際共同研究拠点事業「東南アジア大
部圏における農業近代化以降における技術展開の国際比較」)



平成29年度大川活用プロジェクト活動報告書
[https://pas.cseas.kyoto-
u.ac.jp/NL/Ohkawa/H29report/H29report.pdf](https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/NL/Ohkawa/H29report/H29report.pdf)



南丹市美山町知井地区知見の水田に杉を植林した栽培放棄田を見学する受講生たち 2018年5月21日

活動計画にしたがい、以下のとおり実施した。

①講師招へい:講師としてNPO 平和もやいネットのメンバーの現地調査での資料収集などの支援を行なった。

②現地見学・打ち合わせ・調査:京都府の中山間村のもっとも大きな課題となっている集落維持、放棄地の維持と地元の人たちとの交流、地元の人たちからその経

験を学ぶために、南丹市美山町知井地区において、放棄地の見学、知井振興会での聞き取りや、振興会事務局長からの講義などを聴講した。また、宮津市との「一まち一キャンパス」事業との連携により地産地消や丹後半島で過疎と放棄地の実態、再生事業などの現地との調整や現地調査、フィールド講義などを実施した。

③交流会:本プログラムとプログラム3・4の関連で招へいしたブータン王立大学セラブツェ校の講師や若手研究員との合同で、宮津市の畑地区において過疎問題・離農問題に関する交流会をおこなった。

④資料整理:現地にて収集した二次資料(統計資料、パンフレット、講演者パワーポイント等)の整理、英語翻訳、ホームページの更新作業をおこなった。

以上の活動により、日本の過疎問題を実感として捉えることが難しかった学生たちも京都府下の身近な場所で実際の問題に触れることができた。またブータンの人々と地元の人々との交流により地元の人々が過疎問題、農業離れ問題もアジア的な視野で位置づけることができた。また、滋賀県守山市美崎地区で守山市役所、地元住民らと協働で実施している大川活用プロジェクトの平成 29 年度活動報告書を本プロジェクト資料として印刷し、地元の活動を支援することができた。

プログラム 2 自然と文化－農の営みを軸に－

課題

京滋の農山村が抱える問題を学ぶためには国際的な視野にたつて世界の農林業に京滋の農業を位置づけることが必要である。また、農林業は、生物生産を通じた技術的体系あるいは経済的営為であるだけでなく、自然と深く関わってきた歴史の所産としての文化という側面をもち、その営みを通じて地域の環境形成やその維持にも大きな役割を果たしてきた。国内外での多様なフィールドワークにもとづいて、地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにしつつ、「農」の営みをもつ現代的な意義と意味を竹田他 7 名がリレー講義によって世界各国のフィールドワークを報告している。

成果

本講義は全学共通課目として実施されていて、ゼミナール形式で考えさせる講義ではなく、数十名余りの複数学部所属の学部学生を対象として新知識を伝達する形式の講義となっている。講義では各講師担当の講義に対してアンケート調査を実施して、講義内容の改良にもつとめている。H29 年度は以下の講義を実施した。

講義の内容

第一部 生存を支える農の営み

- 1) イントロダクション (竹田晋也)
- 2) 人類進化における食と自然 (古澤拓郎)

第二部 文化としての水田耕作

- 3) アジアの水田稲作と「緑の革命」(小坂康之)
- 4) 水田稲作と水域生態系 (岩田明久)
- 5) 東南アジアの水産資源とその利用 (岩田明久)
- 6) アジアの市場から地産地消を考える (小坂康之)

第三部 森が育む文化

- 7) ブータンから京都の農林業と農山村を考える (安藤和雄)
- 8) 非木材林産物と資源管理 (竹田晋也)
- 9) ヒマラヤの暮らしの変容 (小坂康之)

第四部 農と食の多様性

- 10) コロンブスの交換（小坂康之）
- 11) 飢餓と災害を乗り越える自然知（古澤拓郎）
- 12) 熱帯島嶼部の暮らしと環境問題（古澤拓郎）
- 13) 自然環境に適応した農のある暮らしの再評価（安藤和雄）
- 14) アジアの食文化グローバリゼーション（古澤拓郎）
- 15) 期末試験：各担当教員が1題ずつ出題する問題のなかから2つを選び、論述形式で回答する試験を実施した。

また、講義を充実させる活動としては、以下の国内調査と学会発表を行った。

①国内農林業調査旅費

広島、奄美での学会報告を兼ねた情報交換及び現地調査、また焼畑の椎葉村での調査を実施した。

②国内外の「自然と文化―農の営み―」に関する資料の整理

本課題に関して国内外の文献図書の資料を購入参照して、その成果を講義に活かした。

また、本年度には「日中植林・植樹国際連帯事業」 日中青少年等交流事業と連携して 31 名（国別内訳はブータン 10 名，ラオス 6 名，ミャンマー15 名）を京都大学短期留学生として受け入れ、11 月上旬に約 10 日間の京滋でのフィールド・スタディーを実施した。滋賀県守山市、京都府宮津市の農村部の視察を行い、まとめのためのワークショップを開催した。海外からの参加学生や若手教員たちは日本の過疎、離農問題に対して現場での知識を得られるとともに、自国の状況との相対化ができたことを大変評価していた。



京大短期留学生の守山市消防署の見学 2017年11月2日

プログラム3 ブータンの農村に学ぶ発展のあり方

課題

本プログラムは現場での実体験こそが過疎や離農の問題に関する自覚を芽生えさせ、理解をすすめるという考え方によって、ILAS 海外科目との協働で実施される。京都大学学部生を2018年2月末から3月に約2週間の間、ブータン王立大学シェラブッチェ校が受け入れとなり、ブータン国のタシガン県の農村をスタディ・ツアーするとともに、国内では、科研プロジェクト「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（安藤代表）などと協働し、シェラブッチェ校から7月から8月にかけての約2週間、講師・学生（若手研究員）合計4名を招へいし、日本の過疎・離農問題をフィールド・ワークによって理解してもらうことと、京都府の宮津市、南丹市の過疎地域に暮らす人たち、講義に参加する京大学生に過疎・離農問題をアジア的視野で理解する課題を設定した。

成果

本プログラムは科研プロジェクト「アジアの在地の協働によるグローバル問題群に挑戦する実践型地域研究」（安藤代表）などと協働し、以下のプログラムを実施した。

- ① ブータン王立大学シェラブッチェ校からの招へい：シェラブッチェ校から7月末から8月上旬に約2週間講師2名と若手研究員（学生でもある）2名を他の事業との共同で招へいし、その内1名の招へい経費の一部に使用した。招へい者は京都府宮津市にてスタディ・ツアーを実施し、畑集落などでの住民との交流会や発表会に出席した。
- ② 安藤や赤松の学会発表や国内調査・発表旅費：①に関する現地調整・事前調査をおこなうとともに国内にてその成果発表をおこなった。
- ③ ILAS 海外科目との協働実施した京都大学学生たち7名をブータンのタシガン県の村落でフィールドワーク講義を行った。

京大生とブータンとブータン王立大学シェラブッチェ校の学生たちはブータンと日本において海外での過疎、離農の現実の状況を現場で実感することができ、自覚を強く抱くようになったというコメントがそれぞれの最終のまとめのミーティングの場で感想が述べられている。

成果は下記の学会発表の短報として公刊している。

Kazuo Ando, Yoshio Akamatsu, Haruo Uchida, Anju Chhetri, Sonam Wangdi, 2017. Depopulation and Abandoning Farming Problem as a Global Issue: Bhutanese Scholars' PRA in Kyoto, Summer 2017. Research for Tropical Agriculture Vo.10, Extra issue 2: 37-38.

https://pas.cseas.kyoto-u.ac.jp/member_gyoseki/ando/andoJSTS171021.pdf



ILAS 海外科目でブータンのタシガン県バルツァム郡の集落で落ち葉堆肥作りのための落ち葉集めの実習を行う京大生とシェラブツェ校の学生 2018年3月7日

プログラム4 在地の参加型実践研究で学ぶ過疎・離農問題

課題

本プログラムは本年度の ILAS のシラバスでは、京都府美山町知井地区や佐々里集落、北集落での泊り込みとしたが、これを修正し、丹後半島の宮津市での地産地消および世屋地区を中心とする過疎集落等を参加型農村調査学習の現場として加える。学習の目標は、1) 道の駅などで直販型朝市、現場集落、行政、自治会、NPO などへの聞き取りと参加型農村調査実習により「参加型実践研究」を経験的に体験することで、日本における過疎・離農問題の現実を実感として理解する。2) 講義の現場では、地形や生態の観察、村人からの聞き取りなどの記録のフィールドワークとフィールドノートのつけ方を学ぶ。3) 実習を現場でまとめて参加者内で発表会を行うことで、「経験にもとづく事実」を人にわかるように発表するという発表の技術と議論の仕方について学ぶ。4) 文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」(京都学教育プログラム)における「いきよし」として開講する。また、この講義との関係で、2017年8月1日から12日

に開催された「China-Japan-Korea SERVE Initiative 2017」のプログラムを宮津市、京都府との一まち一キャンパス事業との連携により実施し、香港理工科大学、韓国梨花大学、北京大学、京大の学部生の総勢 12 名余と引率教員 3 名（1 名香港理工科大学）を受け入れた。

成果

サマースクールの報告書を以下のようにすでに提出してあるので、それをここに再録しておく

「サマースクール報告書（宮津地区）」

京都大学東南アジア地域研究研究所

安藤和雄、赤松芳郎

1) 主な活動内容

- 8/4: オリエンテーション＋各国(中国-香港・韓国)の高齢者問題に関するプレゼンテーション、下世屋集落訪問
- 8/5: 上宮津地区にてまちづくり説明会、昼食会＋地元エコガイドによる杉山エコ・ツアー
- 8/6: まちなか案内人の会による市街地ガイド、吉津婦人会イベント訪問、まちなか案内人の会との交流会(意見交換、文化体験(盆踊り)など)
- 8/7: 田原集落にて集落状況説明会、蕎麦打ち体験
- 8/8: 地元野菜市場(まごころ市)にて聞き取り調査(生産者＋訪問者)
- 8/9: 宮津与謝広域シルバー人材センターにて説明会＋仕事観察・聞き取り
- 8/10: サマースクール活動現地報告会

2) 評価点

- 初日(8/4)に各国の高齢者問題に関するプレゼンテーションがおこなわれたことにより、参加者の相互理解が深まり、後日のプログラムに共通認識を持って取り組むことが可能となった。
- 地域住民の方との対話(小グループもしくは個人)時間を多く設けられたことにより、積極的なコミュニケーションを通してより現状に対する認識が深められた。
- 受け入れ地域・団体からプログラムに関してポジティブな感想が聞かれた(地域を外から見てもらう視点が大切だと気付かされた(上宮津まちづくり会議)、若い人たちが見に来てくれたお陰でこちらも元気をもらえた(吉津婦人会)など)。

3) 成果

参加学生がそれぞれの国が抱える高齢化の現状と課題を共有し、また一方で高齢化社会といわれる日本において、特に 70 歳を超える高齢の人びとが地域活動の中心となり精力的に社会活動に参加している現状を体感することにより、“アクティブ・エイジング”という高齢者の生き方、そして地域発展に繋がる新たな側面が参加学生たちに驚きを持って発見・評価された点は本プログラムの大きな成果と言える。

4) 課題

- 現地合流するまでの事前打ち合わせがメールのみであったため幾つかの点に関して認識

不足があったように思われる。現地に入るまでに一度、諸確認の為のミーティングもしくは顔合わせが必要だったように思われる。

- 現地の状況や天候に合わせて、ある程度のフレキシビリティをもたせた事前スケジュールの作成が必要である。
- 現地プログラムを詰め込み過ぎた為、報告会のためのまとめ・発表準備時間が十分にとれなかった。



サマースクール参加者と宮津市上宮津地区の自治会の皆さんと懇談会 2018年8月5日

プログラム 5「海外との比較による参加型調査学習で学ぶ京滋のアクティブ・エイジング」

課題

すでに説明してきたように、COC 事業において私たちは「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして（「まなびよし」プログラム1～3講義、「いきよし」プログラム4講義）を実施している。これまで実施してきたプログラム1～4は、“京都の未来を考える懇話会”が掲げた次の三点を満たしているといえる。

- ① 大学／地域を越境交流する場を充備すること
- ② 京都学教育プログラムを拡充し、本学が有する先進的「知」を地域社会に活用するとともに、学生の課題解決力を実践的に強化する地域連携型オープン教育を充実すること
- ③ 京都学教育プログラムを通じて愛京心を培い、世界文化交流首都に相応しい京都の持続的発展を担う国際共生人材を輩出すること

プログラム 5「海外との比較による参加型調査学習で学ぶ京滋のアクティブ・エイジング」での課題は、サマースクールで明らかとされたアクティブ・エイジングのモデルとしても日本の過疎・高齢化社会を学ぶことにある。高齢化は日本のみならず、アジアの多くの国で深刻化しつつある問題でもある。一方でプログラムを実施する京滋の農村では高齢者グループの活発な活動は、様々な形で地域を支える重要な柱となっている。本プログラムでは“アクティブ・エイジング”をキーワードに高齢者の方々の地域での生き方を含め、その活動を学習することにより、海外との比較の視点の中で今後の農村の在り方と可能性を学んでいきたいと考える。具体的には以下の計画で実行する。また、本プログラムの申請時には、平成 29 年度の ILAS と共通科目としての講義は終了しているため、平成 30 年度の準備のための試験的な活動とした。

参加型野外集中実習型講義、特に自主的な参加と海外からの招へい学生・研究者との調査の取りまとめ・反省などの協働作業を英語で行うことで、京滋の農村部の実態理解を国際的な視野で学ぶことができるとともに国際共生人材の育成が可能となる（本年度はブータンからの学生 2 名を予定）。また、野外講義終了時には評価もかねてワークショップを可能な限り地元の集落にて行う。また今回はブータンとの比較を通して京滋の過疎・離農問題を学び、国際的な視野を京都で育成するために、京大とブータン交流 60 周年記念シンポ（英語）に受講生が出席し、そこで発表されるブータンの現状と、ブータンと京都大また京都とのかかわりを学ぶ。本シンポにはブータンと日本の王室関係者も出席されるため、参加学生は、国際的品位などの人格力をつける絶好の機会となる。講師を海外から招へい（本年度はブータン王立大学教員を予定）し、宮津市の世屋地区、上宮津地区、日ヶ谷地区を中心とする農村集落を野外講義予定地とした。

成果

当初の実施予定時期が 10 月であったため、京大の学部生が校内で講義がある期間に集中講義として泊まり込みで宮津市や南丹市にでかけることは困難で、募集したが、まったく学部学生が集らなかった。したがって、学部学生の英語でのコミュニケーションのトレーニングには、当初の予定のとおり、京大とブータン交流 60 周年記念シンポに出席（10 名余の学部生が出席）してもらった。ブータン王立大学シェラブツェ校の講師 2 名については、2018 年 2 月 4 日から 14 日に招へいし、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の留学生と日本人院生総勢 10 名余とともにインターンシップでのフィールドスタディと企画を共催して、本プログラムの当初課題を達成した。京都大学の学生たちにとってはブータンの過疎・離農の問題を相対化できる視点が生まれ、活発な意見交換がなされた。



京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科留学生と日本人学生とセラブッチェ校の講師2名とのスタディー・ツアーで訪れた南丹市美山町知井地区での記念写真 2018年2月6日